

町史

とっておきの話

174

只見町文化財調査委員

飯塚恒夫

河井継之助 最後の十二日間

その6 只見から塩沢

継之助は、忠訓・忠恭両殿様の呼び寄せに応じようとはしませんでした。従僕の松蔵が、「奥様の云いつけで遺髪を欲しい」と云うと、快く切らせ、また懐剣を渡し「いざというときは、己を刺してくれ」とも云って、只見を死地と定めていたことが窺われます。



河井継之助の墓（町指定史跡）

8月16日の命日には地元の人々によって墓前祭が営まれている。う説得したのか、良順が帰った翌日、行けるところまで行くことを承知し、七日間滞在した目明し清吉宅を後にして只見を発ちました。途中休所に予定されていた塩沢村の矢沢宗益方で、休息をとります。が、体調思わしくなく、矢沢宅に投宿することになりました。

塩沢の岩瀧清四郎が書き残した『明治備忘録』（岩瀧正明氏蔵）に、「大殿様ハ、矢沢新角方、若殿ハ岩瀧清四郎方、奥方御女中方ハ五十嵐忠道方御休所」とあります。大殿の休所となった「矢沢新角」とは、宗益の次男です。当時三十八歳の新角が矢沢家の当主扱いの書き方になっているのを見ますと、その時の当主宗益は六十歳の年配者であり、長男宗順は病弱であったのか存在が薄く、その長男宗篤は十七歳で山内大学隊に従軍中で不在。新角が矢沢家の当主格であったのではないかと考えられます。

従って、継之助一行の対応は、宗益の次男新角が一切を取り仕切ったと思われる。塩沢における八月十二日から十四日の継之助の様子については、『邑従日記』に植田十兵衛の報告があります。「継之助殿、十二日塩沢駅迄参られ止宿。翌十三日朝五時前より、少々フサギ

十六日の朝、継之助は準備の整った様子を見て、大いに喜び、しばらくの間皆人と談笑して過ごします。午後になって、ひと眠りしようと思いましたが、遠ざけて眠りにつきませんが、そのまま昏睡状態に陥り、午後八時ごろ、波乱に満ちた四十二年の生涯を閉じました。時に慶応四年八月十六日、只見に足を踏み入れて十二日目のことです。

『明治備忘録』に「御家老河井継之助殿手負ニテ当地山崎矢沢新角方御滞在中、死亡セラレ、火葬ニテ御持チトナル」とあり、遺言どおり火葬されました。火葬は翌十七日、塩沢川と只見川合流地点の通称「ざる岩」と云われる川原で、村人によって川木（流木）を集め茶毘に付されたことを伝えています。

塩沢の村人は、火葬の跡の残灰を拾い集め医王寺の墓所に埋葬し、手厚く供養がなされ現在も命日には墓前祭が行われています。